

平成 19・20 年度 JSL カリキュラム実践支援事業実施報告書【授業実践】

実施団体名【 伊丹市教育委員会 】

1 学習活動の実際

(1) 学習指導要領での指導学年と領域 第 2 学年 (数量関係)	
(2) 単元名または活動名 「かくれた数は いくつ」	
(3) 対象児童の実態 (1 人)	
A 児	第 2 学年 国籍 (中国) 母語 (中国語) 在籍年数 (9 か月)
	<p>〈話す・聞く〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつや友だちとの日常会話はでき、簡単な具体的指示はわかる。 <p>〈読む〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平仮名はほぼ読める。片仮名・漢字は、支援を必要とする場合がある。 <p>〈書く〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平仮名はほぼ書ける。片仮名・漢字は、支援を必要とする。 <p>〈在籍学級での学習参加の様子〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習への関心や意欲は高い。学習態度は真面目だが、集中力に欠ける。 ・文章題については、文意を捉えてイメージ化することが容易にはできない。 <p>〈学習環境等〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿題は毎日提出する。学習用具も忘れず準備できている。 ・実技指導員とも、本読みの練習を続けている。
(4) 目標	
◇【教科指導の目標】	
<ul style="list-style-type: none"> ・文意を捉えて、図に描くことができる。 ・逆思考の問題を解くことができる。 	
◆【日本語指導の目標】	
<ul style="list-style-type: none"> ・考えたことを、適切な日本語を用いて表現することができる。 	

2 学習活動

指導者 指導者（学級担任） 指導補助者（日本語指導担当教員）			
全体の時間数（9時間）			
学習活動の状況、指導内容	活動方法	指導上の留意点	有効だった指導等 ◇教科指導について ◆日本語指導について
①ワークシートにより、先行学習をする。	取り出し	○簡単な順思考の文章題を復習させる。 ○逆思考の問題文の文意の把握，線分図の作図の意味とその図の描き方を，ワークシートによる演習により、理解させる。	◆A-6 経験を確認する③ T「1年生のとき，文章題を学習したことを，覚えていますね。」 ◇順思考の文章題を復習し，文意を捉えて絵や図にすることを確認する。 ◆A-3 知識を確認する③ T「文章題を絵や図にして考えることを，学習しましたね。」
②教科書とワークシートにより、理解を深める。	同室複数 在籍学級 (TT)	○演習中，つまづいたとき，ワークシートを提示して振り返ることで，思考の支援とする。	◆K-11 絵や図などで表現する② T「考えたことを，図を使ってお話して下さい。」
③ワークシートの問題を解くことで，まとめとする。	取り出し	○ワークシートを使った演習により定着を図る。	◆K-5 わかったことを表現する① T「『かくれた数はいくつ』の学習で，わかったことをお話しして下さい。」

3 成果

①対象児童に対する成果

本単元は、多くの児童が苦手だと感じている文章題の単元である。さらに、小学校算数科において初めて履修する「逆思考の文章題」である。

これまでの文章題の学習でようやく「わかってきた。」と感じていた自信が、本単元の学習により、つまずきや自信喪失に変化するかもしれないと考えられた。

そのため、学級での指導が始まるまでに、「取り出しによる個別指導」により「先行学習」を行い、「順思考の文章題の復習」と「逆思考の文章題の導入」を学習した。

そのとき、「児童の生活実態に即した問題の場面設定」を工夫することや、「絵や図に描いてイメージ化するスキルの向上」を図れるように心がけて指導した。

その結果、「問題文の文意を正しく捉える」ことや、「文意の数量関係を正しく図に表す」こと、それを「演算決定をして、式と答えに表す」ことの手順と技能を身につけることができた。

まだ完全に習得できたとは言えないが、初めにねらいとしていた「達成感や自信を味わう」ことができ、在籍学級での「友だちとともに学ぶ楽しさ」も経験でき、理解が深まるという成果があった。

②その他

在籍学級においては、「式や答えにする前に、まず、図に描いてみる」という習慣の定着と、「図の描き方」をていねいに指導したことで、「文章題がわかるようになってきた。」と感じる児童が増えてきたことは、確かな成果と考えられる

4 課題

○ 本児の学力の定着・向上を図るため、児童の実態に応じた先行学習による事前学習やスモールステップの指導内容や指導時間に変更して学習展開を行った。

対象児童が少ないため、このように個々の児童の実態に応じたきめの細かい対応ができたと思われる。対象児童が多い場合の対応は、「教材の作成等」に様々な工夫が必要になると考えられ、今後の大きな課題である。

○ 学習中に学級担任と日本語指導担当の「使う言葉」を共通なものとすることも大変重要な要素である。今回も「共通理解」は図っていたつもりだが、細部での「言葉遣いの違い」があった。児童の指導上には支障はなかったが、こうした細やかな配慮も今後の課題である。